

9 昔から今に続くまちづくり

わたしたちが住む登別市には、いつごろから人が住み始めたのでしょうか。土の中から昔の人たちが使った道具が見つかることから、とても前からこの地に住んでいたことがわかります。

登別市は、縄文文化の人たちからアイヌ民族、そして明治時代になって住ってきた宮城県白石市の仙台藩片倉家の人たち、四国や淡路島の人たちなどの歴史や文化の積み重ねによってできています。

わたしたちが住むまちの歴史について調べてみましょう。

登別市の歴史について調べよう



1. アイヌ民族の歴史

(1) 縄文文化～擦文文化

縄文文化期（北海道では1万年前）の人たちは、動物や魚をとったり植物や木の実を採集したりして生活していました。地面に穴を掘り柱を立てて屋根をかけるたて穴式住居に住み、縄の模様をつけた土器を使っていました。登別市内には、地面の下に「遺跡」とよばれる生活の跡がたくさんあり、当時使っていた土器や石で作ったナイフなどが見つかっています。

続縄文文化期(2,500年前)になると本州から鉄を、擦文文化期(1,400年前)には、漆の器や刀などの道具も手に入れ、石器はほとんど使われなくなりました。



④縄の模様やカニのはさみのような模様のある縄文土器 / 登別市 川上B遺跡



④縄文文化のシカをとるための落とし穴 / 登別市 富岸川右岸遺跡



④川上A遺跡で見つかった縄文文化の土偶 / 西嶋峻市氏所蔵

(2) アイヌ文化

800年前くらいになると、自分たちで道具を作るほかにも、交易によっていろいろなものを手に入れるようになり、そのはんいは、遠くサハリンや千島列島にまでおよんでいました。

そのころ、北海道は和人に「蝦夷地」とよばれ、渡島半島の南部に本州からうつり住んだ和人が、アイヌ民族と交易をはじめました。そのうち、和人は自分たちの都合のいいように交易するようになったため、アイヌ民族の不満が高まり、コシャマインの戦い(1457年)やシャクシャインの戦い(1669年)が起きました。

300年前くらいになり、交易が和人の商人にまかされると、商人はもうけるため、アイヌ民族に漁をさせたり、遠くまでニシン漁などに行かせるようになり、アイヌ民族の生活は大きな影響を受けました。

また、天然痘という病気が本州からもちこまれたために、多くのアイヌ民族が亡くなりました。



④本州からの交易品 / 登別市郷土資料館

本州からは漆の器(左)や儀礼用の刀(右)、鉄なべ、酒、タバコなど、北海道からはサケなどの魚介類やコンブ、ヒグマやシカの毛皮、ワシの羽などが交易品となりました。

(3) 明治時代

明治時代（1868年）になると、政府は蝦夷地を「北海道」として日本の一部にしました。政府は法律を定め、アイヌ民族は山や川で狩りや漁が自由にできなくなり、生活が苦しくなって漆の器などの宝物を手放す人も出てきました。

また、名前も和人風に変えさせられたり、いれずみなどの風習も禁止されたりしました。学校では日本語が教えられ、アイヌ語を話せる人も少なくなりました。

そのような中、登別のアイヌ民族、カンナリキ（和名 金成喜蔵）らは自分たちの子どものために学校をつくらうと立ち上がりました。そして明治21年（1888年）、地元のアイヌ民族とキリスト教の宣教師であったジョン・バチラーにより、アイヌ民族の子どもたちのための学校「愛隣学校」がつけられました。



①愛隣学校／登別市
明治21年(1888年)に幌別につくられました。

アイヌ語で何て言うのかな

					
セタ (犬)	ユク (シカ)	チロヌナ (きつね)	キムカムイ (クマ)	フンペ (クジラ)	チエフ (さかな)
					
カムイチフ (サケ)	ラッコ (ラッコ)	ヌプリ (山)	ベツ (川)	アペ (火)	ワッカ (水)
					
チセ (家)	ヤウンモシ (北海道)	レラ (風)	ポロとポン (大と小)	エカシ (おじいさん)	フチ (おばあさん)

アイヌ語の表記について

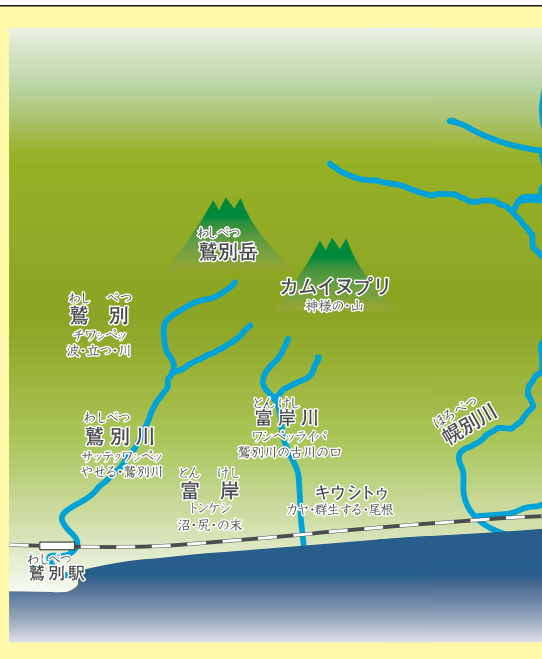
アイヌ語には「フ」や「リ」などのように日本語にない発音があります。その場合は小さく書き、読むときは軽く発音します。

○アイヌ語の地名

登別市の名前は、アイヌ語の「ヌプルベツ」という音に漢字をあてはめたものです。これは、「色のこい川」という意味で、温泉から流れ出る川の水が、いつも白くにごっていたことからつけられた名前だと言われています。

調べてみると、登別市だけでなく、北海道にはアイヌ語をもとにした地名がたくさんあることがわかります。

また、サハリンや千島列島、東北地方にもアイヌ語がもともとした地名があり、アイヌ語の世界が広がっていたことがわかります。



(4) 現代のアイヌ文化

アイヌ民族の文化は、これまでたくさん失われてきました。しかし、1980年代から、失われてきた文化の再生と伝承活動をする人たちが増えてきました。

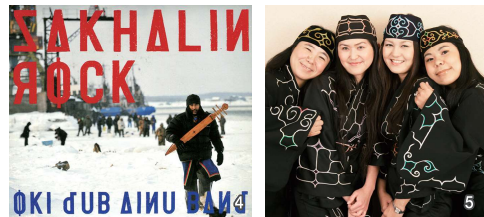
登別市では、秋や新年に行われる伝統的な儀式を復活させたり、民族の大切な文化であるアイヌ語やししゅうなどを学ぶ教室が開かれたりしてきました。また平成22年（2010年）には、登別市出身でアイヌ文化の物語を記した『アイヌ神謡集』の著者である知里幸恵の博物館が、めいの横山むつみたちの活動により開館しました。

音楽やししゅう、木彫りなどの分野では、伝統的なアイヌ文化を引きつぎながら、その特色を現代的に表現する人たちも出てきています。また、漫画を通じてアイヌ文化に関心をもつ人たちもいます。令和2年（2020年）、白老町にはアイヌ文化復興等のナショナルセンターである民族共生象徴空間「ウポポイ」もできました。

わたしたちがくらすこの地で育まれてきたアイヌ文化は、現在もわたしたちのまわりに息づく大切な文化です。



- ① コタンノミ
村の祈りの儀式。登別市では秋に行われる。
- ② 古式舞踊「フンペリムセ」
- ③ 知里幸恵 銀のしずく記念館
- ④ Oki Dub Ainu Band サハリンアイヌの伝統楽器「トンコリ」奏者のOKI率いるバンド。写真はアルバム「サハリンロック」。
- ⑤ マレウレウ アイヌ伝統歌「ウポポ」の再生と伝承をテーマに活動するグループ。



写真/1・2：登別アイヌ協会、4・5：CHIKAR STUDIO

富岸(トンケシ)の津波の話

昔トンケシに大きなコタン(村)があり、6人のリーダーが住んでいました。

ある時、日高のトゥヌウオウシという人がここを通ったら、キウシトゥの上にウサギが1匹立っていて、沖の方へ両手を突き出して、しきりに何者かをまねきよせるような身ぶりをしていました。

おどろいたトゥヌウオウシは、トンケシのコタンに向かって「津波が来るぞ。早くにげろ！」とさげびました。

しかし、トンケシの6人のリーダーたちは、たまたまお酒を飲んでさわいでいたところで、いっせいに立ち上がると、「へん！津波なぞ来てみる！おそろしくないぞ！やっつけてやる！」と言いながら刀をぬいて、ふり回しました。

トゥヌウオウシは、あきれてそのまま一目散に虻田(洞爺湖町)のコタンの方へ走り去りました。そのとき彼の背負っていたカバンが一直線になったまま落ちないほど、ものすごい速さだったそうです。

彼が有珠(伊達市)のコタンまで来た時、はるか後ろで津波のおしよせる音がしました。この津波で古いトンケシのコタンはほろびてしまったそうです。

知里真志保・山田秀三『幌別町のアイヌ語地名』より改編

アイヌ語で話してみよう



1. イランカラッテ
(こんには)
2. エイワンケ ヤ?
(元気ですか?)
3. ジュース エク?
(ジュースを飲みますか?)
4. ジュース クヤン
(ジュースをお飲みください)



1. イランカラッテ
(こんには)
2. クイワンケ ワ
(元気ですよ)
3. エ クルスイ
(はい、飲みたいです)
4. イヤイライケレ
(ありがとう)

2. 本州からのい住の歴史

登別市に多くの和人がい住してきたのは明治時代(1868年)以降のことになります。その人たちのい住してきた理由はさまざまでした。

(1) 開拓の苦労を伝えるもの

幌別地区の中央町にある刈田神社をおとずれると、けいだいに大きな石碑があります。

明治3年(1870年)から4年にかけて、仙台藩(今の宮城県)白石城のどの様だった、片倉小十郎邦憲の長男 景範が、家族や家来約200名をつれて今の登別市にうつり住みました。この石碑は、登別市が今のようにひらかれるもとなった、彼らの開拓の功せきを記念して、大正15年(1926年)に子孫が建てたもので、当時の苦労をわたしたちに伝えてくれています。



① 開拓記念碑(刈田神社)

どんなことが書いてあるのかな？

片倉景範らがい住した当時の登別市は、木がうっそうとおいしげり、ヒグマやオオカミもいて大変苦労したこと、景光(景範の子)らが開拓をうまく進め、現在のひらかれた土地になったことが書かれています。

(2) 開拓使

明治2年(1869年)7月、外国から北海道を守りながら、開拓を進めるために、政府は「開拓使」という役所をつくりました。

はじめは、函館にありましたが、明治4年(1871年)に札幌にうつされました。



② 開拓使札幌本庁(北海道立文書館)

開拓使は、全国でせん伝して開拓する人を集めたり、開拓にかかるお金を一部出したり、い住した農民のためにこく物・野菜の種を給したりしました。

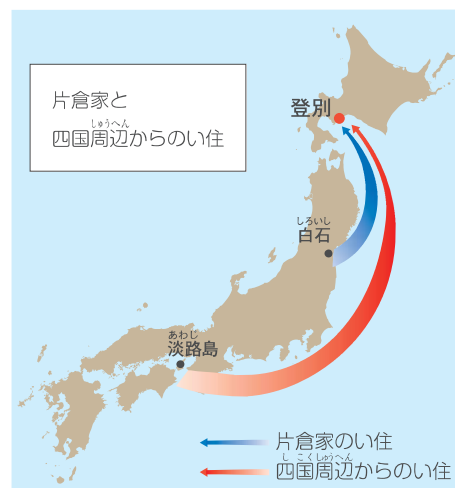
また、アメリカやヨーロッパの進んだ機械を取り入れたり、すぐれたぎじゅつ者をまねいたりして、ゆたかな北海道をつくろうとしました。

(3) 片倉家のい住

今の登別市にうつり住んだ片倉景範たちは、明治政府との戦争に負けて、それまで住んでいた土地を失ったこともあり、開拓使と相談し、アイヌ民族の協力も得ながら、新天地で苦労して新しいまちをつくっていきました。

このころの登別市は、うっそうとしたあれ地で、大きな木がしげっており、地面にはクマザサがびっしりとはえていました。土地を切りひらくには、まず雨や風をふせぐ家をつくらなければなりませんでした。かまでクマザサをかり、大きなのこぎりで木を切りたおし、みんなで力を合わせて共同の家をつくりました。

しかし、かべなどはヨシなどの草でつくられており、きびしい冬の寒さを乗り切るには十分でなく、とても苦労しました。



③ 片倉景光／登別市郷土資料館

また、くわやのこぎりを持って畑をおこすのは大変で、苦勞はたえませんでした。

ひとくわひとくわ木の根をほり、少しずつ作物を育てようと、家族全員で朝からばなまで一生けん命畑をつくり、種をまきました。

しかし、この土地にできた作物がわからないばかりか、きりがかかって気温が低く、作物の育ちもよくありませんでした。せっかく育っても、シカやカラス、野生の馬などに食いあらされてしまうこともありました。そのため、食べ物がなくなり、木の実や野草を食べなければならない苦しい生活でした。

開拓使が米やみそを2年間配給するなどしましたが、苦しい生活はあまり変わりませんでした。

○白石村などへのい住

片倉家とその家来のい住の後、明治3年(1870年)から3回に分けて、今の宮城県白石市から北海道にい住しましたが、最後の1回は登別市ではなく、今の札幌市白石区・手稲区などにい住しました。

こちらは登別市にくらべ、天候にめぐまれた土地でもあったことから、開拓は順調に進められました。

このように歴史的なつながりもあり、平成28年(2016年)11月、登別市と札幌市白石区はこれから先、友好と交流を深めることをちかう宣言をしています。



④開拓する人々が小屋を建てている様子
／『明治・大正期の北海道(写真編)』



④開拓当時の農衣
片倉景光妻のタケ着用
／登別市郷土資料館

(4) 四国からのい住がはじまる

片倉家とその家来のい住の後、北海道へのい民ぼ集の声が全国各地にかけり、明治14年(1881年)ごろから四国周辺の農民が、まとまって今の登別市にうつり住みました。明治8年(1875年)からのい住者の多い地いきをみると、香川県からが最も多く、次に、兵庫県淡路島、徳島県となっています。香川県では、登別市にい住することを決めた人たちが、ふるさとの金刀比羅宮にたて1.5m、横2.6mの大きな絵馬(重要文化財)をほう納して、開拓の成功を祈りました。



④い住者の子孫によって復元された
金刀比羅宮ほう納絵馬の写真
／登別市郷土資料館

この人たちは、それまで今の片倉町付近や国道、川沿い(幌別・鶯別地区)で開拓していた人たちと力を合わせて、土地を切りひらく作業を進めました。

○記録されたつらい生活

ふるさとを後にし、四国からい住してきた人々の生活は、明るいものではありませんでした。

い住の世話をしてくれるはずの人にお金をだましとられたり、ようやく登別市に来てあたえられた広い土地も、土の質が悪く畑作に不向きで、新たな土地にかえてもらうよう役所をお願いしなくてはいけなかったりすることもありました。

明治15年(1882年)に香川県からきた宮武藤之助という人は、昭和24年(1949年)にその当時をふりかえって『丈草の記』という本にしました。

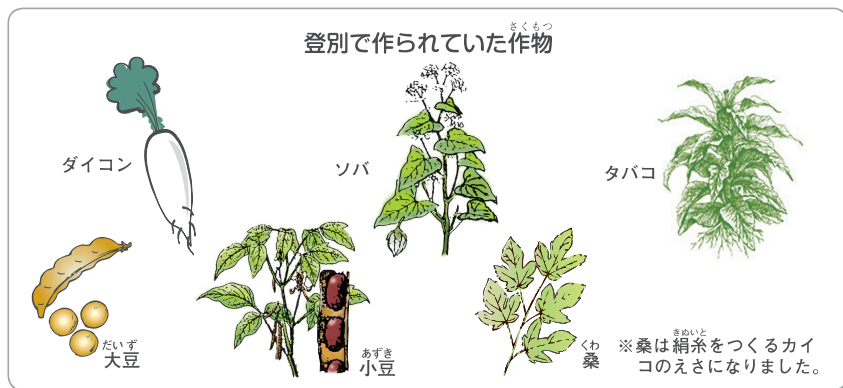
“(掘立小屋を完成させた)翌日からは天のように高い大木とおいしげるクマザサを相手の聞こんである。用意していた聞こん用具では、仕事は進まず、それでも種をまく時期をおくらせてはいけなかったので、けん命に努力して一家6人で1日に2坪(1坪は約3㎡)か3坪、ひらきや

すい所で数坪ひらいた所には、その日のうちに種をまく。こうして毎日汗だくになり、作業を続けるのである。…こんな苦勞もなんのその、芽を出し花をつけたので、収穫の秋に希望をつなぎ胸をおどらせていたが、北海道の気候風土に慣れない種は、丈はのび、花は開くが実は一つもつかず、わずかにイモを少々とりいれたのみで、収穫はほとんど無いに等しい、悲さんな結果に終わった。…”

これだけでなく、明治16年(1883年)には、トノサマバッタの大発生で畑があらされたこともありました。東の方からとつぜんあらわれたバッタは、空いっぱいに広がって太陽をおおい、大きな音で人びとにきょうふをもたらしました。バッタの大発生は2~3日ですぎりましたが、たくさんたまごを産みつけられたうえに、農作物が食い荒らされるなど、大きな被害がでました。

(5) 村から町へ

こうして、たくさん苦勞や努力をくり返しなが、まちづくりは進められました。やがて、生活が少しずつ落ち着き、幌別村を中心にまちがだんだんひらけてきたので、明治13年(1880年)には、五つに分かれていた村を三つにまとめ、幌別村、鶯別村、登別村としました。大正8年(1919年)には、3村を一つにして幌別村となり、人口の増加とともに昭和26年(1951年)には、幌別町となりました。さらにその10年後、町名は登別町に改められました。



登別市の先人たち



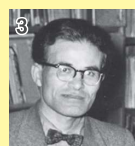
1 【金成 マツ】

ユカラなどの言葉だけで語りつがれてきた物語を約100冊ものノートにローマ字で記録しました。その功せきがたたえられ、国や登別市から表彰されています。知里幸恵、真志保のおばにあたります。



2 【知里 幸恵】

アイヌ語を初めて日本語とローマ字で記録し、『アイヌ神謡集』を書きました。語学にすぐれており、上手な語り部でしたが、19歳の若さで亡くなりました。市内に「知里幸恵 銀のしずく記念館」があります。



3 【知里 真志保】

知里幸恵の弟です。北海道大学などでアイヌ語を研究し、『分類アイヌ語辞典』など多くの成果を残しました。52歳で亡くなる直前まで研究を続け、生涯をアイヌ語研究に捧げました。



4 【山田 秀三】

北海道・東北に残されているアイヌ語地名を研究しました。知里真志保とともに仲のよい研究仲間でした。現在も登別市にある北海道曹達株式会社(ソウダカフシキカ)の初代社長でもあります。



5 【片倉 景光】

父・景範や家来とともに今の宮城県白石市から登別市へい住しました。後に景範は札幌市へうつり住みましたが、景光は残り、家来らの精神的な支えとなりました。明治31年(1898年)に開拓の功せきにより男爵となりました。



6 【滝本 金蔵】

安政5年(1858年)、今の埼玉県から蝦夷地開拓のために、妻とともに北海道へ渡りました。同じ年に現在の登別市にうつって登別温泉の湯守となり、温泉の開発や周辺の道路の整備に力をつくしました。



7 【白野 久橘】

明治32年(1899年)に、今の室蘭市輪西の薬屋とともに共同でカルルス温泉の開発を役所に願い出て、許可を受けます。温泉の開発、カルルス温泉までの道路の整備などに力をつくしました。

写真1・2：NPO法人知里森舎、3~5・7：登別市郷土資料館、6：1985『市史ふるさと登別』